大田市埋蔵文化財調査報告　19

石見銀山遺跡発掘調査概要7

1994.3

島根県大田市教育委員会

序

島根県のほぼ中央、大田市大森町には戦国時代から江戸時代を通じて開発された石見銀山遺跡があります。石見銀山は戦国時代には戦国大名の尼子氏や毛利氏によって争奪戦がおこなわれ、江戸時代にはいると幕府の直轄領、天領として支配され、盛んに銀が掘り出されました。また石見銀山から多量に産出された銀は、戦国時代にはヨーロッパ人たちによってアジアやヨーロッパにもたらされ、世界経済にも影響を与えたといわれています。石見銀山に関連する文化財として、史跡や建造物、美術工芸品など様々なものが大森町にのこされています。大田市教育委員会ではこれらの貴重な文化遺産を未来に伝えるために、史跡の整備・町並み保存事業などに取り組んでおります。遺跡の発掘調査もわずかづつではありますが継続して実施し、特に今年度からは銀の山として知られる仙の山一帯について発掘調査を行なっています。

今回報告書をまとめました石銀集落跡は仙の山頂上部に近い大規模な銀生産の遺跡として注目され、新資料が次々に発見されたところです。

本書が中世末期における日本の銀生産の実態を解明し、当時の日本における鉱山技術を知る基礎資料として活用されることを祈念して序といたします。

平成6年3月

島根県大田市教育委員会

教育長　大久保　昭夫

例　　言

1．本書は平成５年度の国庫補助事業として島根県大田市教育委員会が実施した、石見銀山遺跡発掘調査の報告書である。

2．調査体制は下記のとおりである。

事 務 局　　島根県大田市教育委員会

教　育　長　　大久保昭夫

文化振興室　　品川　保夫　　清水新二郎

森井　琢磨　　遠藤　浩巳（担当者）

山田　　幸

調査指導　　田中　圭一（筑波大学歴史人類学系教授）

葉賀七三男（資源素材学会理事）

村上　　勇（広島県立美術館主任学芸員）

松村　恵司（文化庁記念物課文化財調査官）

熱田　貴保（島根県教育委員会文化課主事）

丹羽野　裕（　　〃　　）

3．収録した地図・実測図は大田市教育委員会が作成したものを主とし、一部については関係機関作成のものを利用した。

4．出土遺物及び作製した図面・写真は大田市教育委員会で保管している。

5．実測図等に示した方位はいずれも磁北である。

6．本書の執筆・編集は上記の遠藤がこれをおこない、関係各位の協力を得た。特に出土した陶磁器については広島県立美術館村上勇氏、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏からご教示いただいた。記して謝意を表す次第である。

目　　次

Ⅰ　調査の概要・経過 …… 1
Ⅱ　石見銀山遺跡の概要 …… 4
Ⅲ　調　査　の　概　要 …… 8
Ⅳ　小　　結 …… 22

挿図・目次

図1　石見銀山遺跡位置図（1／25,000） …… 2
図2　石銀地区調査地位置図（1／5,000） …… 3
図3　石銀地区調査区設定図（1／400） …… 9
図4　坑道前出土肥前磁器実測図（1／3） …… 10
図5　石銀地区遺構配置図（1／100） …… 11～12
図6　ＳＫ1実測図（1／60） …… 13
図7　ＳＫ1出土かわらけ実測図（1／3） …… 13
図8　ＳＫ2実測図（1／60） …… 14
図9　ＳＫ3出土遺物実測図（1／3） …… 14
図10　第1石積選鉱施設実測図（1／60） …… 15
図11　第2石積選鉱施設実測図（1／60） …… 16
図12　第2石積選鉱施設出土肥前陶器実測図（1／3） … 16
図13　吹床跡実測図（1／60） …… 17
図14　出土陶磁器実測図（1）（1／3） …… 18
図15　出土陶磁器実測図（2）（1／3） …… 19
図16　石製品・金属製品実測図（1／3） …… 21
図17　出土古銭拓影 …… 21
図18　石銀地区遺構配置図（1／200） …… 23

Ⅰ　調査の概要・経過

石見銀山遺跡は昭和44年に史跡指定を受けて以来、代官所跡や坑道跡である間歩を中心に整備と活用が進められている。また埋蔵文化財としての石見銀山遺跡は、昭和58年度以降継続して調査が実施され、地下に埋蔵された産銀遺跡など、これまで未解明であった遺跡の実態が少しづつ明らかにされている。

平成３年度には、江戸時代初期に操業した製錬所（吹屋）跡が銀山下河原で発見され、吹屋の作業の様子がわかる遺構が検出されている。建物敷地内には土間に埋め込まれた要石（かなめいし、鉱石を砕く臼)、土間面よりも一段高い石組の作業台、精錬作業に伴う排水施設などがあり、建物の構造は礎石建物で敷地境には側溝が築かれている。遺構面からは精錬の際に排出される鉱滓（からみ）や選鉱作業で排出されるゆりかすが多量に出土している。

平成４年度は、国指定史跡山吹城跡の下屋敷地区で調査をおこない、トレンチ調査であったが、それぞれの調査地で戦国時代の城館遺跡の遺構や、江戸時代初頭の吹屋跡の遺構の一部が検出された。このうち吹屋跡の遺構は吹床跡が２ケ所検出されたが、精錬工程のどの段階のものかは特定できなかった。出土したからみから、精錬された鉱石は永久鉱床のもので、銅を含む鉱石が精錬されたと推定されている。

平成５年度は、銀山の最盛期に露頭掘りにより採掘がおこなわれ、大集落が形成された仙ノ山頂上部分に広がる石銀地区で調査を実施した。石銀地区については、石見銀山遺跡総合整備により、いくつかの整備事業が計画されているが、林道仙ノ山線開設に伴い詳細な分布調査が実施され、その全容が明らかにされつつある。林道仙ノ山線の線形については、遺跡の存在が予想される平坦地を回避しながら設定したが、石銀地区中心部で回避することが困難であるため、平成４年度に千畳敷南向山地区で発掘調査を実施し、試掘調査の段階で、建物の礎石の一部が検出され、また出土遺物として戦国時代から江戸時代初頭にかけての陶磁器が多量に出土した。埋蔵文化財保護と開発事業との調整がおこなわれ、林道事業は千畳敷南向山地区を終点とし遺跡の保護が図られた。

石銀地区の調査については、石見銀山の最盛期に露頭掘により採掘され集落が形成された地であり、将来は総合的な調査が望まれるべきところであったため、千畳敷南向山地区で継続して調査をおこなうこととし、平成５年度に国庫補助事業として実施することとした。

図1　石見銀山遺跡位置図（1／25,000）

調査は石銀地区・千畳敷南向山地区の約300㎡のうち、谷の中央を東西にはしる道跡があり、その北側の約150㎡を調査対象として実施した。調査期間は平成6年1月から3月までのうち約2ケ月間を要し、この間、3月に計3回の調査指導会をおこない、3月末に調査を終了した。標高約470mの山頂近くであり、また冬場の調査という厳しい条件ではあったが、調査の結果貴重な成果が得られた。調査の間、地元大森町から参加していただいた調査作業員の皆さんをはじめ、多くの方々からご協力をいただいた。改めて感謝したい。

図2　石銀地区調査地位置図（1／5,000）

Ⅱ　石見銀山遺跡の概要

1．石見銀山史について

(1)　戦国期の再開発と争奪戦

石見銀山は鎌倉時代の末期の延慶２年（1309）に発見され、本格的な開発は大永６年（1526）に博多の商人神屋寿貞と出雲鷺浦の銅山師三島清右衛門が入山、天文２年（1533）寿禎が博多から慶寿と宗丹を連れて来て「灰吹法」と呼ばれる銀精錬法を現地に導入、それ以降産銀料は著しく増大したと『銀山旧記』は伝えている。灰吹法は石見から各地の鉱山に伝えられたことで日本は世界の中でも有数の産銀国となり、またこれまでの銀の輸入国から輸出国へ転換するという対外貿易史上の画期をもたらした新しい技術であった。当時環日本海域でおこなわれていた日朝貿易・日明貿易において日本から半島・大陸へは主に銀が輸出され、生糸・絹織物・鉛が輸入された。東南アジアの香辛料を求めたポルトガルはこの貿易に目をつけ、中国の生糸・絹織物などを搭載して日本に来航し、銀を手に入れ東南アジアの香辛料を持ち帰る中継貿易をおこなった。日本で産出された銀は東南アジアの国々に流れ、政治・経済に大きな影響を与えたわけだが、この時の銀の大部分が石見銀山産であったと推測されている。

銀山争奪戦は大内・小笠原・尼子の間で繰り返されるが、大内氏の後覇権を得た毛利氏と尼子氏が最終的に争い、毛利氏が銀山を完全掌握するのが永禄５年（1562）である。『銀山旧記』は争奪戦の経過について以下のように記している。

享禄元（1528）　大内義興、矢滝の城主を以銀山の押えとす
享禄４（1531）　小笠原長隆、志谷修理太夫・平田加賀守を以矢滝の城を攻め落す
天文２（1533）　大内銀山を取り返す、吉田若狭守・飯田石見守が銀山を守護
天文６（1537）　雲州の尼子銀山を攻め、吉田・飯田を誅戮す
天文８（1539）　大内また銀山を攻めて取り返し、正重をもって奉行とす
天文９（1540）　小笠蜂起して、大久保肥前守・大谷遠江守に仰せて銀山を騒動す、終に奉行内田正重自害し、銀山また小笠原に属す
天文11（1542）　小笠原長隆卒す、小笠原兵部太輔長徳山吹の城に入る
天文16（1547）　８月21日、長徳卒す
天文17（1548）　小笠原長雄、３月城に入る
永禄４（1561）　毛利元就銀山を取り、平賀山城守・高畑源四郎を山吹の城に置

く（尼子毛利の攻防の始まり、永禄５年毛利銀山を完全掌握）

元亀２（1571）　元就卒す、嫡輝元続けて銀山を領す

天正年中　秀吉公の上使近実若狭守、毛利家より之使三井善兵衛、銀山を奉行

天正14（1586）　永田大隅守、銀山御目附として下る

天正15（1587）　三坂牧源蔵、銀山御目附として下る

天正16（1588）　増島左門、銀山御目附として下る

天正15年（1587）に、石見銀山は中央で天下統一をすすめる豊臣秀吉と毛利氏の共同管理に移行し、秀吉は文禄２年（1593）の朝鮮出兵時には、多量の石見銀で文禄丁銀を造り戦費に充てたといわれている。

(2)　大久保長安の経営と江戸期の石見銀山

慶長５年（1600）関ヶ原の戦いで徳川方が勝利をおさめると、家康は石見銀山に上使を派遣して翌６年から大久保長安を銀山の管理奉行とし、周辺の 144 ヶ村、約 4 万８千石を石見銀山御料として直轄料とした。大久保長安は鉱山経営に甲州流とよばれる新しい技術を導入すると共に、御料内の検地などを実施した。『銀山旧記』は長安の時代の最盛期の様子を「慶長の頃より寛永年中大盛、士稼の人数二十万人、一日米穀を費やすこと千五百石余」とか「家数弐万六千軒余、寺百ケ寺程も有之」と記されている。全体に誇張があるが、人口２万人前後はあり、産銀量も年間 6,000 貫から10,000 貫はあったと推定されている。寛永年間以降は坑道が深くなり湧水処理に経費がかかるようになり、延宝年間（1673〜1680）にはいると産銀量年間約400貫に減り、幕末の安政６年（1859）には30貫と記録にある。

江戸時代 265 年間には奉行・代官・預りが59人も入れ替わり、石見銀山御料約 150 ヶ村４万８千石の統治と銀山の管理をおこなった。その中でも初代奉行大久保長安と享保17年（1732）の飢饉を救った19代目の井戸平左衛門は有名である。慶応２年（1866）に戊辰戦争が起き長州軍は石見へ進撃し、益田の七尾城、浜田城を落して銀山御料内へ侵入、代官鍋田三郎右衛門は備後国の上下の陣屋に逃亡した。これより長州藩が旧銀山御料の管理と統治の任にあたった。明治政府が誕生すると、明治２年８月から約半年間大森県が置かれ翌３年から浜田県と改められ、同９年には隠岐・松江・浜田を合わせて現在の島根県がつくられた。幕末から明治期の産銀量は慶応２年（1866）には年産20貫まで減り、明治期になり大森の有志が一鉱区を掘ったが思わしくなく、

明治５年の浜田沖地震では銀坑道のほとんどが崩壊した。明治20年になって大阪の藤田組の経営となり、その後同和鉱業㈱に受け継がれ、明治25～29年頃までは、一時的に産銀量が年平均540貫と増加した。明治以降は永久鉱床の銅が中心に採掘され、仁摩町の永久坑道が主坑道となり、坑口に選鉱、精錬の緒施設が置かれた。大正６年の大森鉱山の従業員は約700人いたが、坑道の地下水が多量に湧き出るため採算が合わず、大正12年３月に閉山されることになった。

２．石見銀山に関連する遺跡について

石見銀山遺跡は大田市大森町を中心に周辺の仁摩町・温泉津町・邑智町などを含めた広範囲に遺跡が分布し、その中心となる大森町では約100ヶ所の遺跡が存在する。

(1) 城館遺跡

戦国時代に石見銀山の争奪戦の拠点となった山吹城跡とその周辺に城館遺跡がある。要害山に築かれた山吹城跡は頂上部に階段状に郭に配し、主郭の南には大規模な空堀、南斜面には計19本の竪堀、北側の郭には一部石垣がみられる。山麓の大手の下屋敷地区には休役所跡と焔硝蔵跡の大規模な石垣がのこり、休役所跡については調査で礎石が確認されたことで、大手一帯には休役所に関連する遺構が存在すると考えられている。周辺の城郭として、仙ノ山城郭群・矢滝城跡がある。

(2) 銀山支配関連遺跡

銀山支配の遺跡として代官所跡・番所跡などがある。代官所跡は南北に細長い谷間に形成された大森の町並みの北側に位置し、表門と門長屋が現存している。代官所の東には中間長屋跡・向陣屋跡・御銀蔵跡・馬場跡などがあり、代官所周辺には行政関係の機関、役宅が置かれていた。江戸時代銀山はその周囲に柵列を巡らし、山内として閉鎖され、９ヶ所の口番所だけが入り口となった。この口番所の遺跡として蔵泉寺口番所跡、坂根口番所跡が知られる。坑道の入口には四ツ留役所跡があり、龍源寺間歩前で遺構を確認している。

(3) 銀生産遺跡

坑道跡・吹屋（製錬所）跡・集落跡などがある。史跡指定された間歩は大久保間歩・龍源寺間歩など７坑道があるが、文政６年（1823）の間歩改めでは休止坑を含め279坑を数えている。間歩のほかに竪坑や露天掘り跡も多くみられる。吹屋跡としては栃畑谷吹屋跡・山神奥吹屋跡があり、発掘調査された遺跡として、下河原吹屋跡、山吹

城跡下屋敷地区で検出された吹屋跡がある。鉱山集落の大規模なものとして石銀集落跡、栃畑谷集落跡がある。

(4) 信仰遺跡

墓地・供養塔などの石造物と寺院跡、神社がある。石造物のうち宝篋印塔・五輪塔などの墓地は戦国期から近世までのものが多数残されている。寺院跡はこれまでの調査で33ヶ所の寺跡が確認されている。神社としては式内社の城上神社、毛利元就を祀る豊栄神社、銀山の守護神としての佐毘売山神社がある。

(5) その他の遺跡

大森の町並みの中には町年寄遺宅・郷宿遺宅・地役人遺宅・同心遺宅などの建物跡がある。町の大半が消失した寛政12年（1800）の大火以前の町並みの遺構についても、河島家敷地内調査で明らかにされたように、遺存している可能性がある。

Ⅲ 調査の概要

1．遺跡の位置と環境

石見銀山遺跡石銀地区は大田市大森町大森字千畳敷南向山イ 1621 番地他に所在する。石銀（いしがね）は仙ノ山、通称石見銀山の山頂の北から東にかけての、標高約470m前後の地点に広範囲に存在する平坦地の名称である。地名として「石銀池ノ段」「石銀薬師ノ段」「金生山」などがのこる。

石見銀山の開発は戦国時代に本格的に始まるが、この時期の文献史料が少ないため、戦国時代の石見銀山の実像は不明な部分が多い。江戸時代に記された『銀山旧記』は、銀山の再開発を手懸ける博多の商人神谷寿貞が出雲鷺銅山の三島清右衛門と共に銀山に入るのが大永６年（1526）で、天文２年（1533）に大陸の先進精錬技術である「鉛灰吹法」が導入され現地での銀精錬が可能となったと記している。初期の開発は石銀一帯の路頭銀が採掘され、灰吹法の導入が天文享禄期の大盛りをもたらし、路頭銀が採掘され尽くされると、文禄年間の坑道掘りの採用、近世初頭の大久保長安による甲州流の鉱山技術により再び石銀は本格的に開発され、慶長から寛永期の最盛期になると考えられている。

石銀の初見史料は天正９年（1581）の「石見銀山納所高注文」（『毛利家文書』）で、毛利氏支配下での銀山の公納額が記されているが、その中に「いし金口役」とみえる。慶長５年（1600）11月の「石見銀山諸役未進付立之事」（『吉岡家文書』６）によれば慶長期に「石銀ノ酒役」として税がかけられていたことがわかり、慶長期には「石銀酒場」があり町ともいえるような活況を呈していたと想像される。

石銀地区の分布調査の結果、宅地と思われる平坦地、井戸跡、寺跡、墓地、道、池、溝などが広範囲に確認され、丘陵斜面には坑道跡が多数存在することが判明している。採集された遺物に、陶磁器・要石（かなめいし）・羽口、精錬の際排出されるからみ（鉱滓）がある。陶磁器のうち石銀の開発の指標となるものに、16世紀後半の中国磁器、16世紀末から17世紀初頭の肥前陶磁がある。

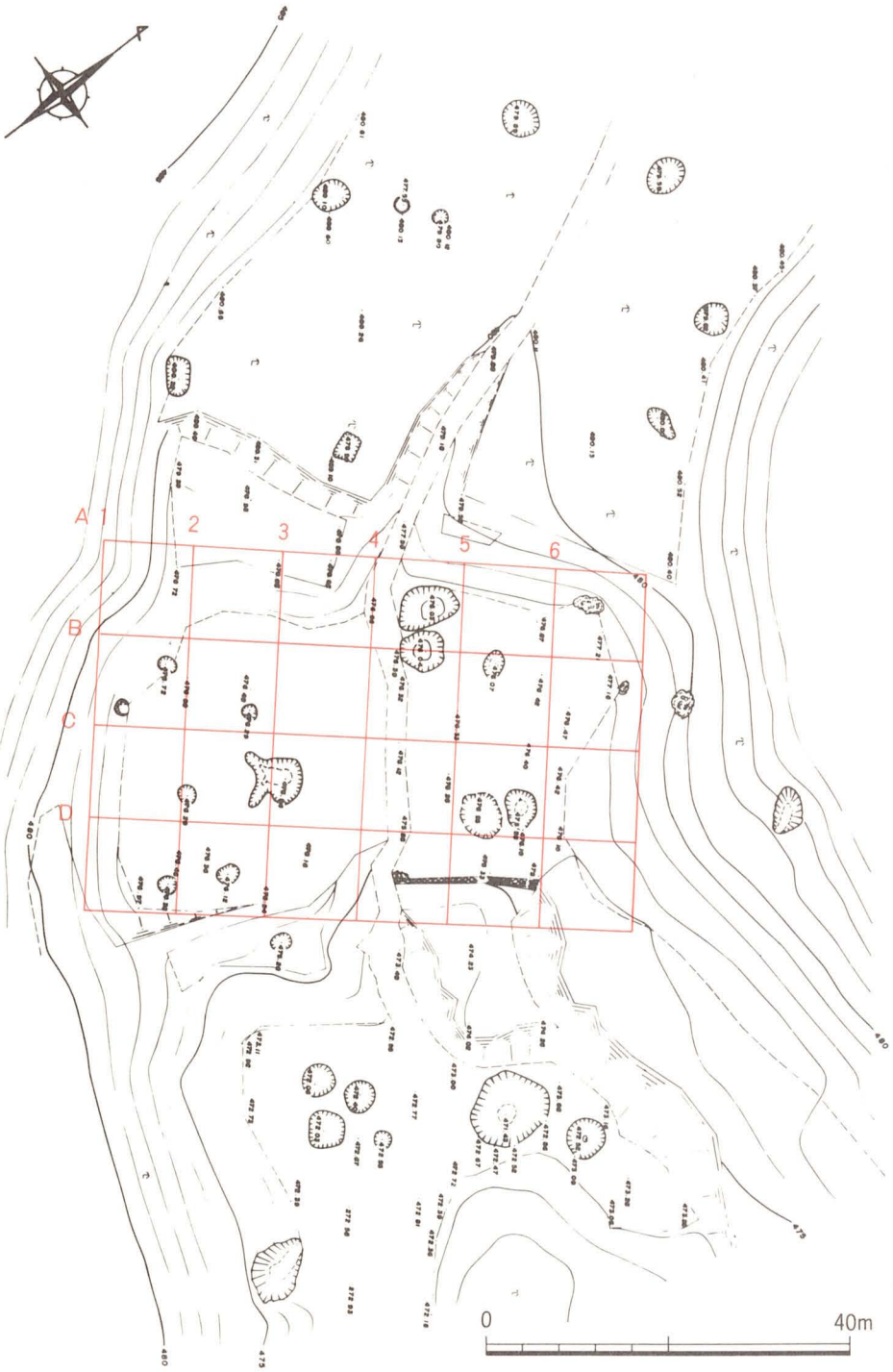


図3．石銀地区調査区設定図（1／400）

2．調査の概要

(1) 調査の概要

今回調査の対象地は東西に細長く広範な広がりをみせる石銀地区のほぼ中央の南、幅20 m前後の谷間に位置する平坦地である。調査対象面積は約360㎡で、平成5年度は谷のほぼ中央をはしる道より北側を主に調査の対象とした。

調査地は「千畳敷南向山」という地名がのこる地域である。現況は竹林であるが、確認できる遺構として、調査地の東に平坦地整地の際に築かれた石垣が、平坦地内には道跡と性格不明の径1～2 m前後のくぼみが11ヶ所存在した。またこの調査地の西側、一段高い平坦地にも、同様のくぼみが確認され、また石積みの井戸跡が存在する。隣接する東側の一段低い平坦地には数ケ所でくぼみを、南側尾根の斜面の裾で鉱脈をそのまま掘り進んだ鋪押しの坑道跡を確認している。

調査は任意に5 m四方の調査区を設定し、南北方向の杭を南から1～5、東西方向の杭を西からA～Dとし、調査区の名称は南西隅の杭をもってA1区のように呼称することとした。表土除去後、精査をおこない第1遺構面を検出した。

検出した遺構の概要は、調査区のほぼ中央を南北に幅約1．0～1．4 mの道跡があり、道を挟んだ南北に礎石建物跡がある。南側については南斜面の裾で坑道跡と建物の礎石を検出した。この坑道跡の坑口は縦約100 cm、横60 cm前後を測る長方形で、坑道は東に曲がりながら下っており、坑道内の規模等から探査を目的とした坑道であったと考えられる。この坑道前の広場の土間面から肥前磁器の皿が1点出土しており、坑道が稼業した時期の指標となる。口径13．2 cm、器高2．8 cmを測り、文様は内面は松竹梅、外面は唐草文が描かれ「大明年製」の裏銘がある。時期は概ね1690～1730年代と考えられる。

北側では石垣の上と中央の道寄りで礎石を検出し、両側とも遺構が良好な状態で遺存していることが確認された。今年度の調査期間、遺構の重複等を考慮した場合、全域の調査は困難であると判断されたため、今年度は中央の道から北側の調

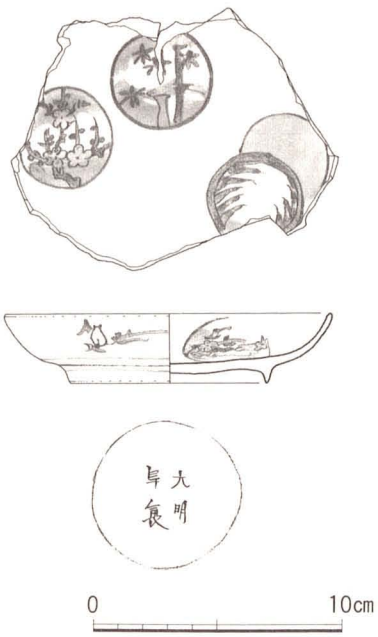


図4　坑道前出土肥前磁器実測図(1／3)

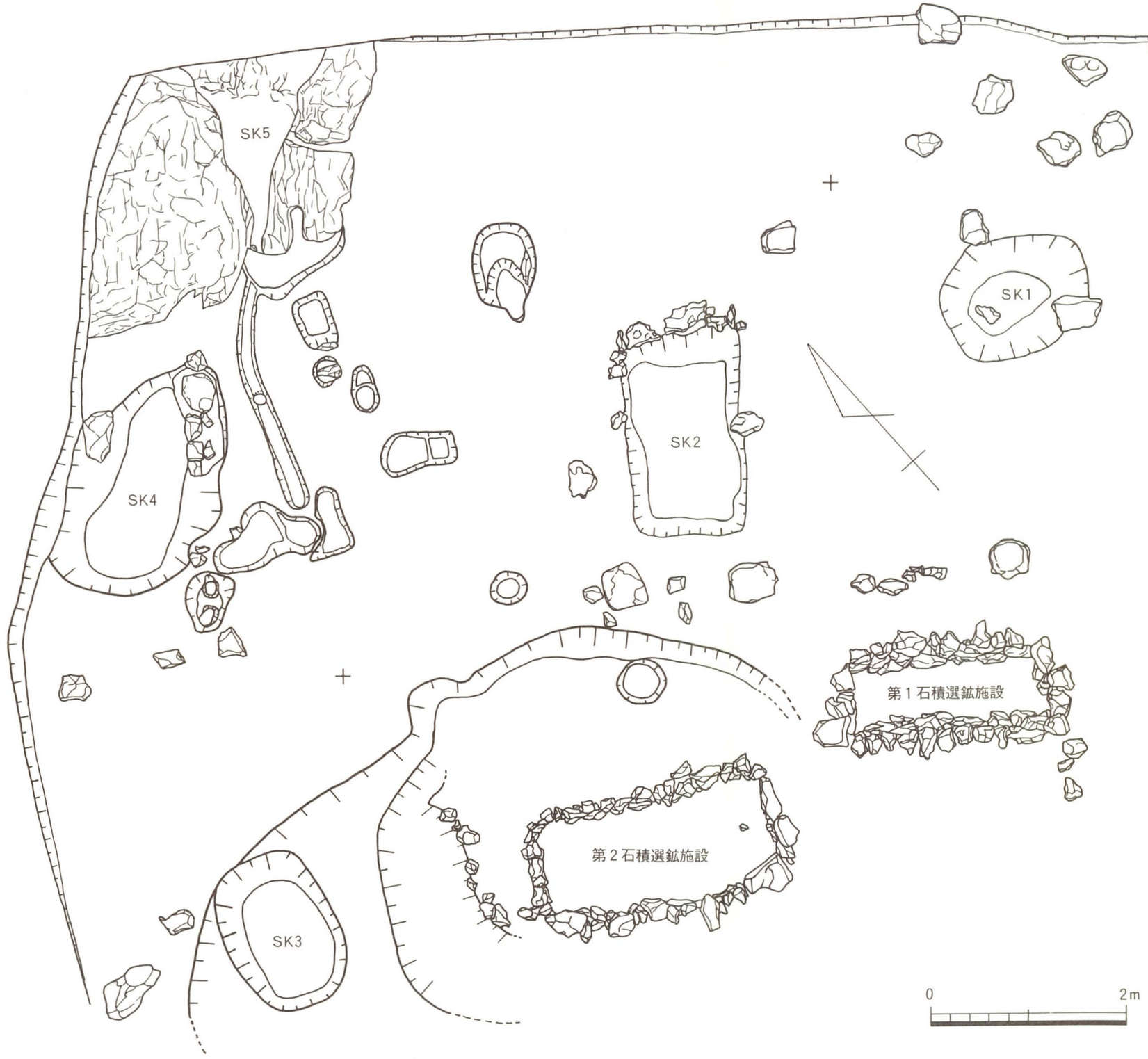


図5　石銀地区遺構配置図

査に重点を置くこととした。北側の調査は第１遺構面での遺構の検出と、道よりの部分に広く選鉱の際排出されるゆりかすが堆積していることが判明し、この堆積したゆりかすを除去し、遺構の確認することが中心となった。

検出した遺構として礎石建物跡、建物内部で選鉱施設と考えられる長方形の土壙、石積選鉱施設、土壙、柱穴などがある。出土した遺物として16世紀後半から近世の陶磁器、古銭、煙管、羽口、からみなどがある。

(2) 遺構・遺物

ＳＫ１（図６・７）

地表面観察でくぼみが確認されたものの一つである。楕円形の掘り方で長径約１．５ｍ、短径約１．３ｍ、深さ約65㎝を測る。この土壙の南側と東側に平坦な石を検出しているが、この土壙に伴うものかどうかは判らない。特に南側の石は土壙内と土間面にまたがって検出しており、土壙が埋没した後に埋められたと考えられる。東側の石については平坦であることから礎石か土壙に伴う施設の可能性がある。土壙内底面で長方形の石を検出しているが、性格は不明である。ＳＫ１内の土層は二層に分層され、上層が黒褐色土、下層が黄褐色粘質土である。下層の黄褐色粘質土は粒子が微小で粘性がややあり、この層の下層には炭化物が多く含まれる。

出土した遺物に陶磁器・かわらけがあり、いずれも下層の黄褐色粘質土から出土したものである。図７はＳＫ１から出土したかわらけである。１、２とも明瞭な底部をもつ皿で底部から口縁にかけて、１はやや外湾気味に、２はほぼまっすぐ立ち上がる。１、２とも回転糸切痕があり、いずれも黒変した油の付着や二次焼成がみられ、灯明皿として使用されたと考えられる。このほか小片であるが肥前系陶器、瀬戸美濃系陶

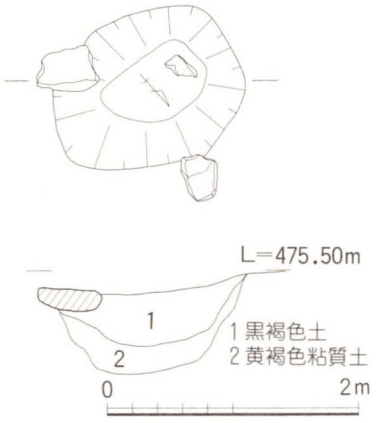


図６　ＳＫ１ 実測図（１／60）

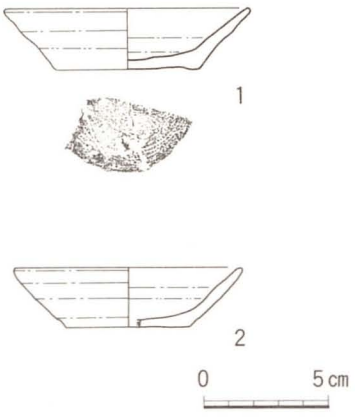


図７　ＳＫ１ 出土かわらけ実測図（１／３）

器がある。

ＳＫ１の性格については、焼土化した箇所や、遺物の中に精錬に関連するものがないことから、精錬施設ではなく鉱石を砕いた選鉱施設の可能性がある。

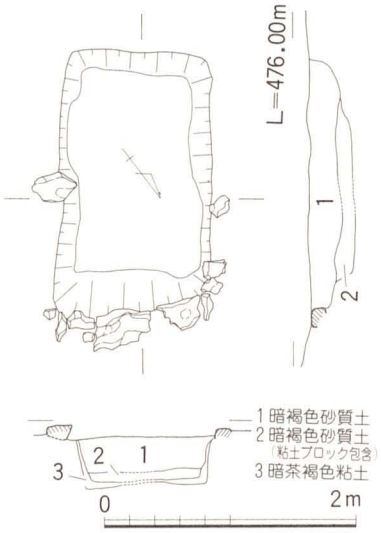


図８　ＳＫ２ 実測図（１／60）

ＳＫ２（図８）

Ｂ５区で検出した長方形の土壙である。長辺が約１．９～２．１ｍ、短辺が約１．２ｍ、深さ35～40㎝を測る。この土壙の北側の縁には石列が検出され、土壙を補強する役割を果たしていたと考えられる。層序は上から暗褐色砂質土、暗茶褐色粘土のブロックを含む暗褐色砂質土に分層され、最下層と壁面に暗茶褐色粘土の堆積が観察される。１層の暗褐色砂質土は、選鉱の際排出される砂粒状のゆりかすが堆積したもので、２層はゆりかすと暗褐色粘土のブロックが堆積したと考えられる。３層の暗茶褐色粘土は粒子緻密で粘性が強い粘土で、土壙底面と壁に付着している。

このＳＫ２から出土した遺物には、陶磁器、古銭がある。陶磁器は小片が数点あり、中国磁器・肥前陶磁・かわらけがある。古銭は銹化がすすんでいるが無文銭と思われるものである。

ＳＫ２の性格については堆積している土層の状態から選鉱施設と考えられる。水を溜めた施設で、この中で細かく砕かれた鉱石がゆり盆等の道具を使って比重選鉱（ゆりわけ）が行われ、鉱石分の濃いところが集められたと考えられる。

ＳＫ３（図９）

Ａ４区で検出した楕円形の土壙である。長径約１．６ｍ、短径約１．２ｍを測り、土壙内の堆積土層は暗褐色粘質土の一層である。この土壙の壁面については土間面と同様に黄褐色粘質土で築成されている。

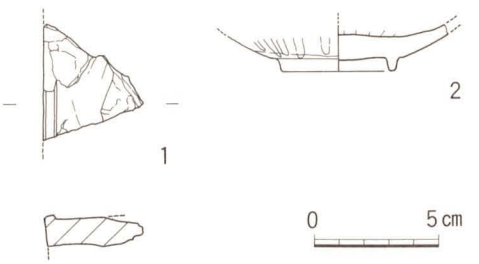


図９　ＳＫ３ 出土遺物実測図（１／３）

出土遺物には、硯、陶磁器などがある。図９－１は硯の破片である。２は瀬戸美濃系志野の皿である。内外とも花弁を形どり、それにあわせて口縁を波状に形どった菊皿になると思われるものである。

ＳＫ３の性格については、壁面が黄褐色粘質土で築成されていること、隣接して石積選鉱施設があることから、水溜めの施設と考えられる。

ＳＫ４

Ａ５区で検出した不整形の土壙である。土壙内はほとんど礫が堆積し、西側の壁は地山である明黄褐色粘質土が掘削されている様子が明らかになったが、周囲の壁については何層かに整地された面を掘り込んでいるため、明確な壁が検出できなかった。土壙底で平坦な石を検出したが、下層の遺構に伴う礎石の可能性がある。遺物は出土していない。

ＳＫ５

Ａ６区で検出した岩盤を掘削した不整形の土壙である。土壙壁面に鉱脈を穿った痕跡が溝状に確認されることから、鉱石を採掘されるために掘られた土壙と考えられる。遺物は出土していない。

第１石積選鉱施設（図10）

内法で長辺約１．８ｍ、短辺約０．５ｍ、深さ約70㎝を測る長方形の石積みの施設である。３～５段に凝灰岩系の自然石を積み、隙間を黄褐色粘土で充填している。底面は黄褐色粘土のたたきでかなり固く締まっている。施設内はゆりかすと考えられる暗褐色の砂層が全体に堆積している。遺物は陶磁器片が数点と古銭が出土している。

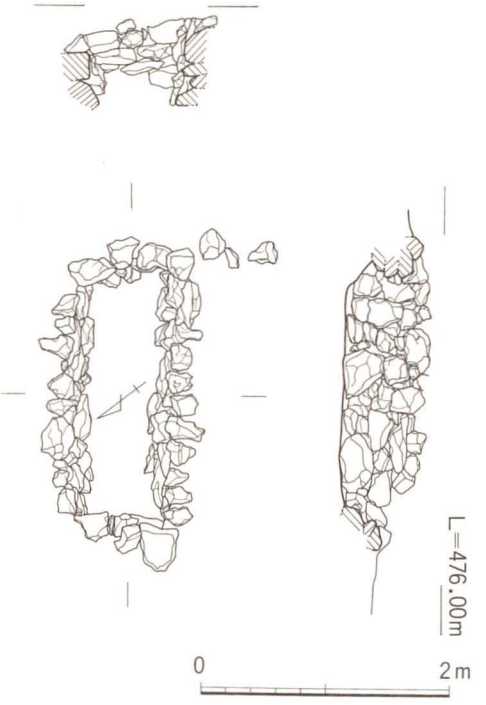


図10　第１石積選鉱施設（１／60）

この施設の性格は、ゆりかすの堆積と、石組の隙間の粘土による充填から、水を溜めゆり分けをおこなう選鉱施設と考えられる。

第２石積選鉱施設（図 11•12）

第１石積選鉱施設の西で検出した、内法で長辺約２．３ｍ、短辺約０．９～１．０ｍ、深さ約 80 ㎝を測るほぼ長方形の石積みの施設である。４～５段に凝灰岩系の自然石を積み、隙間を黄褐色粘土で充填している。施設内はゆりかすと考えられる暗褐色の砂層が堆積しているが、底を検出する過程で東西の石積みよりで径約 20 ㎝の掘り形のピットを検出した。東側のピット内には杭が打ち込まれており、遺構に伴う何らかの施設があったものと考えられる。

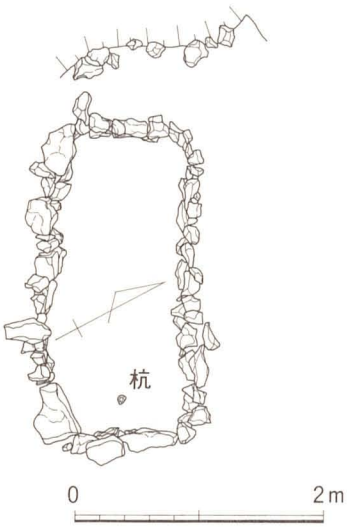


図11　第２石積選鉱施設実測図（１／60）

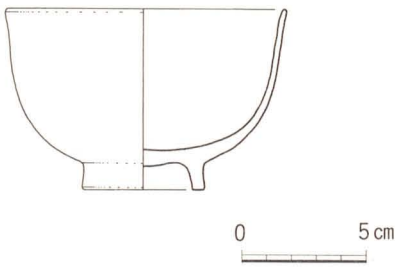


図12　第２石積選鉱施設出土肥前陶器実測図（１／３）

遺物は施設内ゆりかすの堆積の中から陶磁器片が数点出土している。図12はほぼ完形に近い肥前系陶器の碗である。高台畳付以外は内外とも明茶褐色の釉がかけられている。時期は 1620 ～ 50 年代と思われる。

この施設の性格は第１石積選鉱施設と同様にゆり分けをおこなう選鉱施設と考えられる。

吹床跡（図 13）

平坦地東の石垣の上、南北方向に並ぶ礎石に沿って、３ヶ所で吹床状の遺構を検出している。北側は長径約 90 ㎝、短径約 50 ㎝の楕円形で、内部は炭、焼土を含む黒褐色土が厚さ５㎝程度堆積している。西側が最もよく焼土化し固く締まっている。焼土化した部分に接して 10 ㎝前後の石が３個埋め込まれている。中央と南側のものは復原径 60 ㎝前後のほぼ円形で、内部は炭と焼土を含む黒褐色土が堆積しているが半分以上が壊されている。これらの吹床の性格は、焼土化した部分がわずかで、構造が単純なことから本格的な吹床ではなく、るつぼを使って品位分析をおこなう、試し吹の吹床と考えられる。また北側で検出した吹床に接して据えられた石は、羽口を安定して設置するための石の可能性がある。

図13　吹床跡実測図（１／60）

羽口と陶磁器（図 14•15）

今年度の調査で出土した遺物のうち注目されるものとして羽口と陶磁器がある。図14－１はＣ６区から出土した羽口の破片である。胎土は砂粒を含まない緻密で、焼成は良好である。色調は灰褐色～淡橙色を呈しているが、外面は部分的に熱を受け赤茶色に変色している。断面の形状は方形ではなく台形に近く、この破片は羽口の先端に近い部分と推定される。羽口の内径は復原すると直径 15 ㎜前後になると思われ、この内径の数値からも銀精錬に使用された羽口と考えられる。

出土遺物のうち圧倒的に量が多いのが陶磁器で、その概要は 16 世紀第３四半期以降の染付・白磁を中心とした中国陶磁、16 世紀末以降の唐津・伊万里等の肥前陶磁が中心で、そのほか瀬戸美濃系、備前焼、信楽焼、地元産と考えられる陶器、かわらけなどがある。これまでの調査で出土した陶磁器の組成をみると、16 世紀末から 17 世紀は中国磁器と肥前陶磁が中心となるが、肥前陶磁を含まず瀬戸美濃系、備前焼と中国磁器という組成で出土する包含層があり、一段階古い組成と考えられる。概ね時期は16世紀後半以降である。

図14－２～９は肥前陶器である。２～５は碗で、このうち５はぐい呑みの小形の碗で底部は回転糸切痕が未調整である。６、７は摺鉢で、６は口縁を内側に折り返したような形で、条痕はかなり磨滅している。７は底部を碁司底様に削り出したものである。８は皿で砂目当てのもの、９は甕で口縁を外側に折り返したものである。10～13は肥前磁器である。10、11は皿で口唇が外反しないもので、文様は菊をあらわした草花文である。時期は 1630 ～ 40 年代のものと思われる。12、13 は染付碗で、12 は体部から口縁にかけてゆるやかに内湾するもので、文様は網目文である。13 は体部か

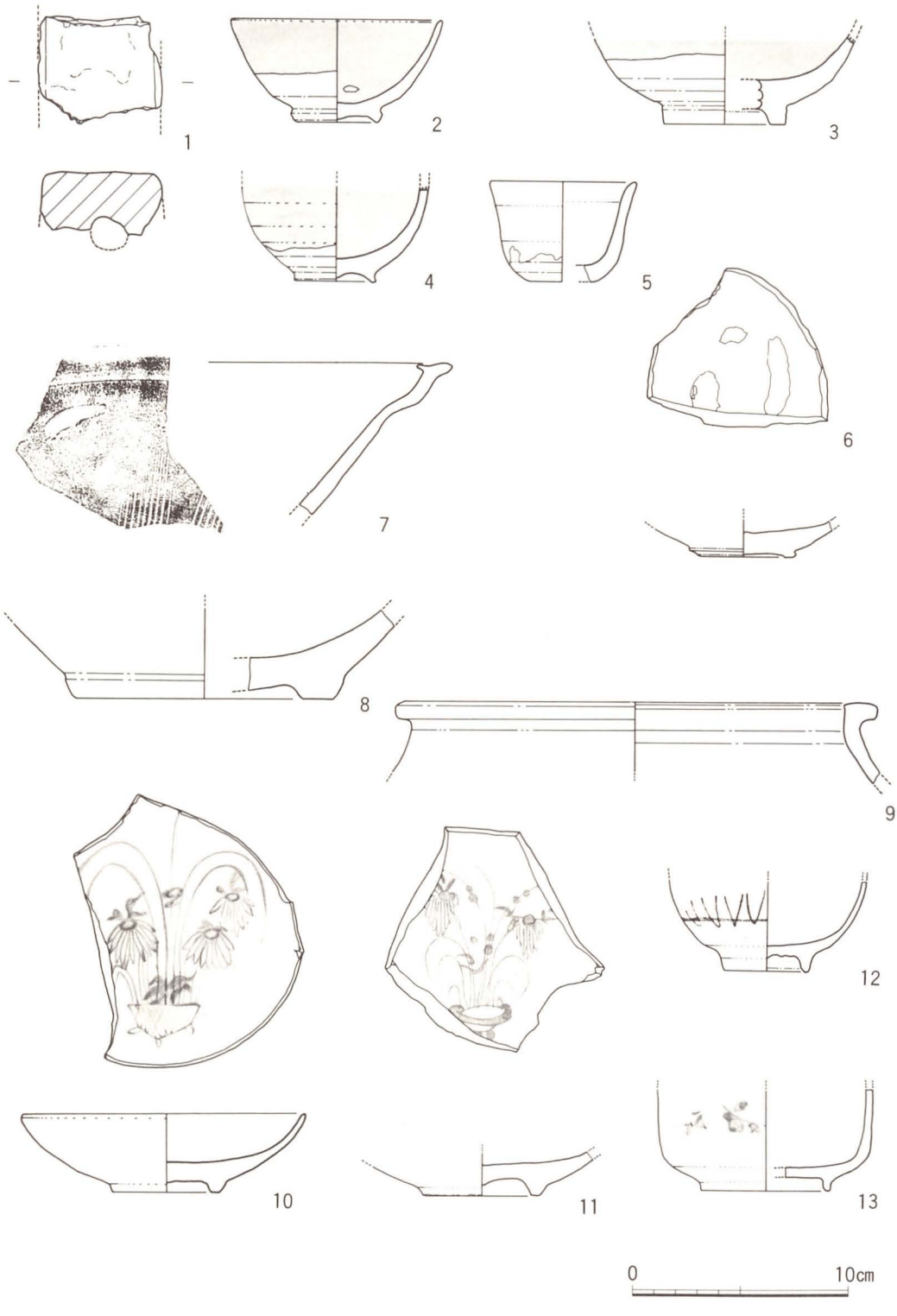


図14　出土陶磁器実測図 (1) (1 ／ 3)

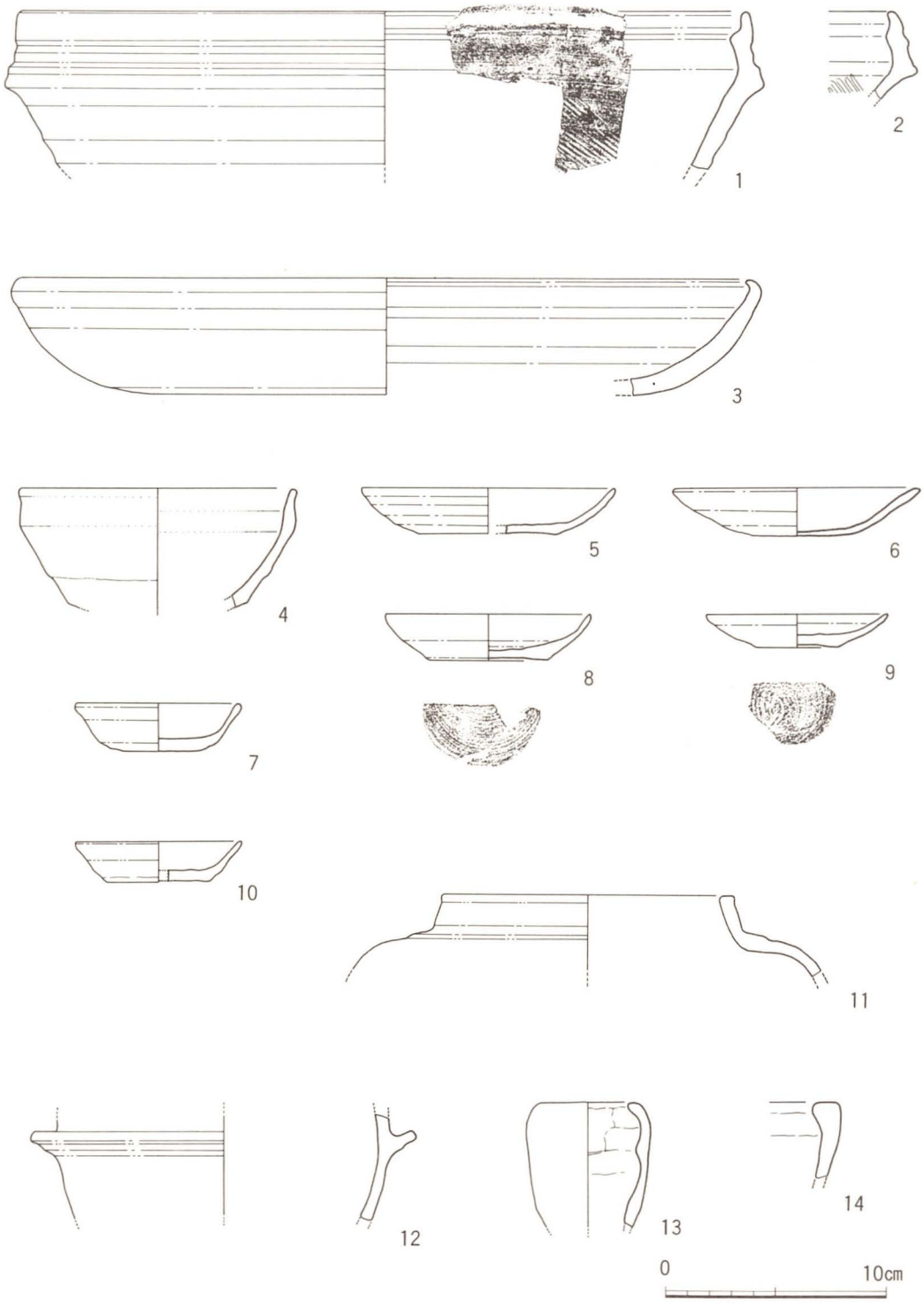


図15　出土陶磁器実測図 (2)（1／3）

ら口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がるもので、草花文をあらわしたものである。出土した陶磁器のうち出土量が多いのが肥前陶磁であるが、図化できない小片が多量にあり、その中には絵唐津などもあり、時期は16世紀末のものからみられる。

図15－1～3は備前系陶器で、1、2は摺鉢で片口をもつものと思われ、口縁部外面には凹線が廻るものである。3は口径がかなり大形になる平鉢で、口縁端部を内側につまみあげる様に形作っている。4は瀬戸美濃系陶器の碗で、黒褐色の鉄釉をかけたいわゆる天目茶碗である。5～10はかわらけの皿である。ほとんどが明瞭な底部をもつものであるが、6のように底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部が外反するものがある。5、7～10の底部については8、9のように回転糸切痕が未調整のものがある。これらの皿は内外面にスス付着や油痕がみられるものと、二次焼成をうけ全体が黒色を呈するものがあり、いずれも灯明皿として使用されたと考えられる。11、12は地元産陶器と考えられるもので、ともに土師質で内外面ともに金属分と思われる付着やスス付着がみられることから精錬用に使用されたと考えられる。11は壷、12は鍋状の器形になるかもしれない。13、14はかわらけであるが、13は手ずくねで成形され、口縁部が内傾し内面に一部金属分の付着がみられるもの、14は口縁の端部が厚くなり内傾しているものである。いずれもるつぼになると思われる。

図化できなかったものに中国磁器が小片であるが多数出土している。そのほとんどは染付であるが、白磁もわずかながら含まれる。時期は16世紀第3四半期以降のものが中心である。

その他の遺物（図16・17）

羽口片、陶磁器のほか出土した遺物に、砥石、碁石、金属製品、古銭などがある。図16－1は砥石で、四面が使用されたものである。2は径2．3㎝を測る碁石である。碁石と考えられるものはこの1点だけであるが、その他に2～3㎝程度の河原石が十数点出土しており、碁石の可能性がある。3は小刀の一部で柄に象嵌がみられる。4は煙管の雁首である。その他金属製品として和釘が数点あるが錆化が著しい。

図17は出土した古銭である。1は第1石積選鉱施設内から出土した洪武通宝である。後鋳銭と思われる。2、3は寛永通宝、4は無文銭である。

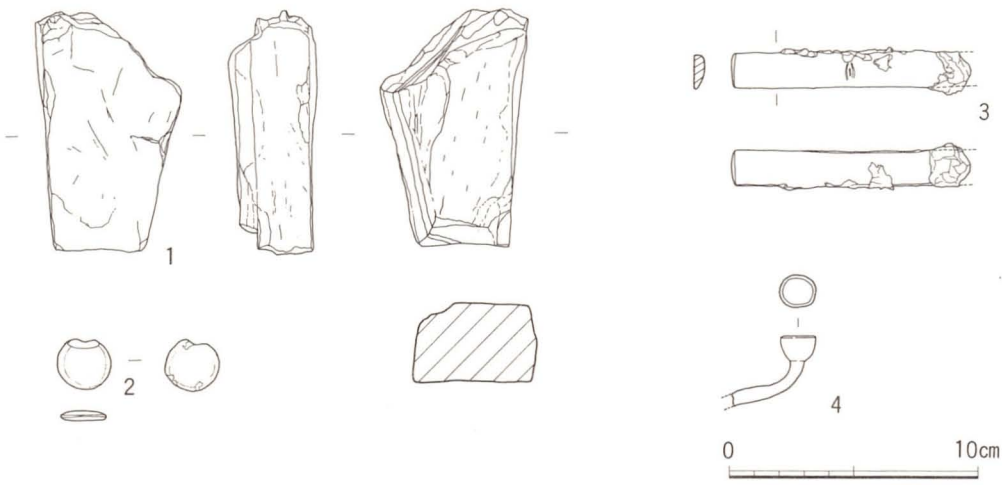


図16　石製品・金属製品実測図（1／3）

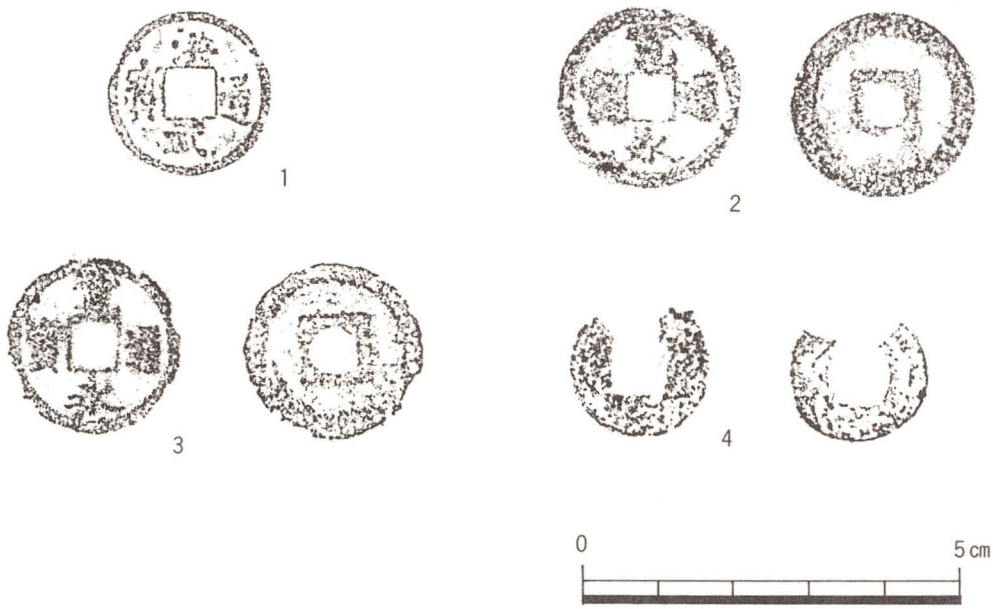


図17　出土古銭拓影

Ⅳ 小　　結

平成5年度の石見銀山遺跡石銀地区の調査の結果、谷の中央に位置する道を挟んだ両側の平坦地に、製錬施設をもつ礎石建物跡が検出された。今年度は北側の平坦地の調査に重点を置き、南側については平成6年度以降も継続調査のため遺構の詳細な調査は実施できなかったが、石積選鉱施設や吹床などの遺構と、羽口・からみ・ゆりかすなどの出土から選鉱（粉成）と精錬（床吹）をおこなった製錬所（吹屋）と考えられる。時期については遺構面から出土した陶磁器から17世紀前半と推定される。

検出した礎石建物跡の規模・構造については礎石の配置から、南北方向に3間以上、東西方向に6間の建物と考えられる。建物内にはＳＫ１、ＳＫ２などの選鉱施設、精錬施設である吹床跡をもち、 建物の構造は礎石建物であることから、壁は耐火を考えた土壁で、精錬作業で発生する煙や亜硫酸ガスの換気のため屋根は高く、煙突や窓を多くもつ構造であったと思われる。礎石列と平行した位置で検出した第1石積選鉱施設も礎石建物跡に取り付く覆屋の内部の可能性がある。ＳＫ４の周辺で検出した石列については、さらに西側に続く可能性があり小規模な建物が隣接して建っていたと考えられる。第2石積選鉱施設とそれに伴う円形の作業スペースについては、この部分に堆積していたゆりかすや礫の状態から、第1石積選鉱施設よりも一段階古い遺構と考えられる。また今回出土した遺物のうち、羽口やるつぼなど精錬関係のものが何点かあり、遺構が吹屋であることを裏付けることとなった。

建物部分に設定したトレンチの土層を観察すると、整地面が複数あり、また出土する遺物に16世紀後半以降の陶磁器がかなりあることから、古い時期の遺構面が何面か存在すると考えられる。

今後の調査は南平坦地の調査と並行しながら、今年度調査地の下層の遺構、及び製錬所内部の諸施設の構造の調査をおこない、製錬所の性格と時期を明らかにしていかなければならない。

いずれにしても石銀地区の調査は石見銀山の最盛期を解明することにつながり、長期的な調査計画のもとで年次的に進めることが必要となっている。

図18　石銀地区遺構配置図（1／200）

調 査 地 現 況

調査地中央の道跡

調査地東の石垣

調査地北斜面のズリ推積

東平担地の坑道跡

西平坦地の井戸跡

西平担地の墓石

検出した坑道跡

調 査 風 景

調 査 地 全 景

SK1　完 掘 状 況

SK2　完堀状況

SK3　検出状況

第 1 石積選鉱施設検出状況

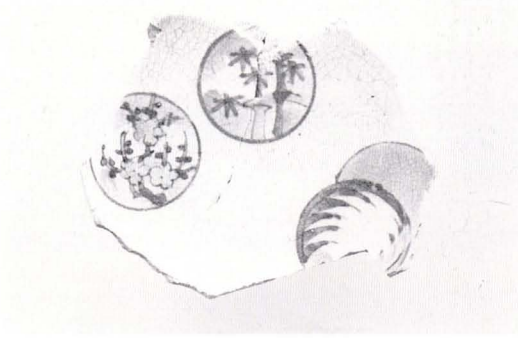
第 1 石積選鉱施設北壁

第２石積選鉱施設検出状況

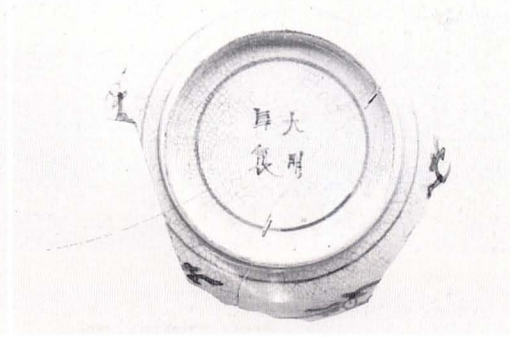
ゆりかす堆積状況

陶磁器出土状況（遺構面）

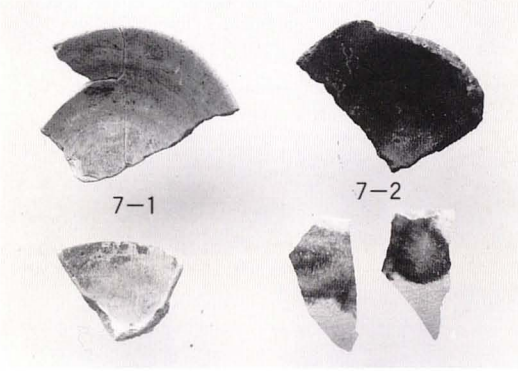
陶磁器出土状況（第２石積選鉱施設）



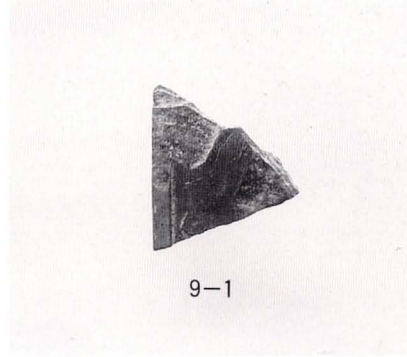
坑道前出土肥前磁器皿（内面）



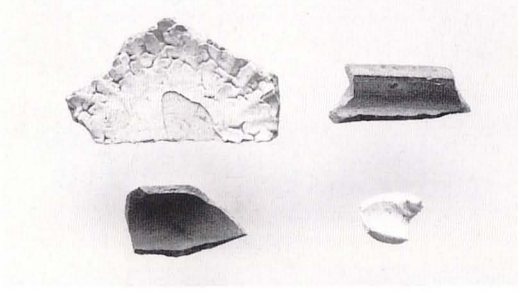
（外面）



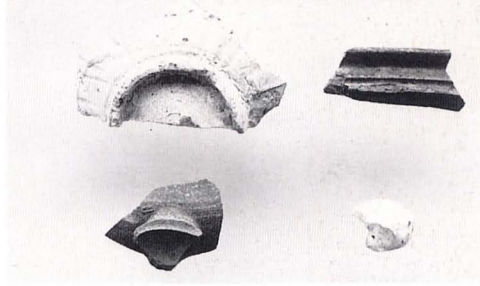
SK1 陶磁器



SK3 硯

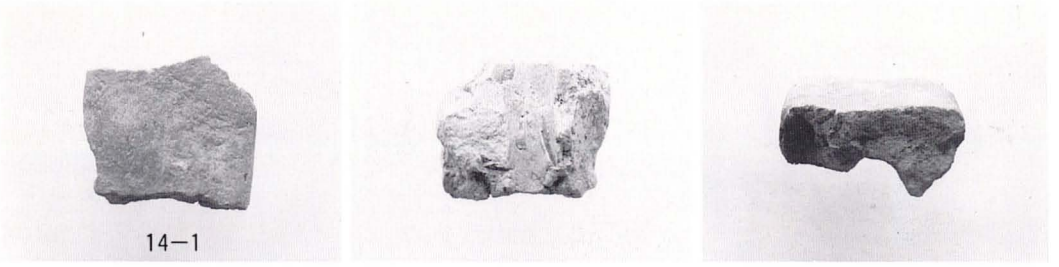


SK3 陶磁器（内面）

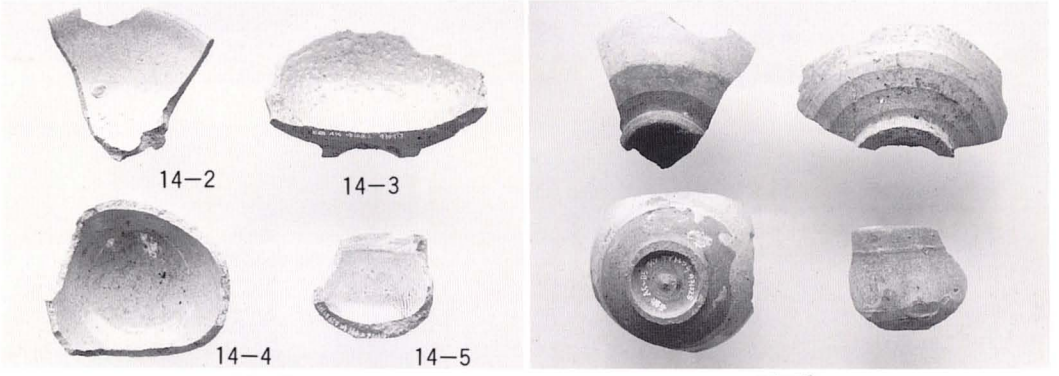


（外面）

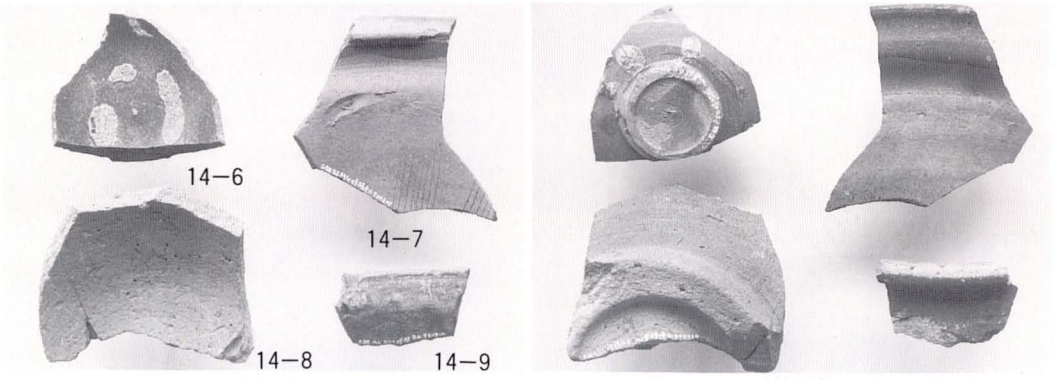
第2石積選鉱施設
肥前陶器碗



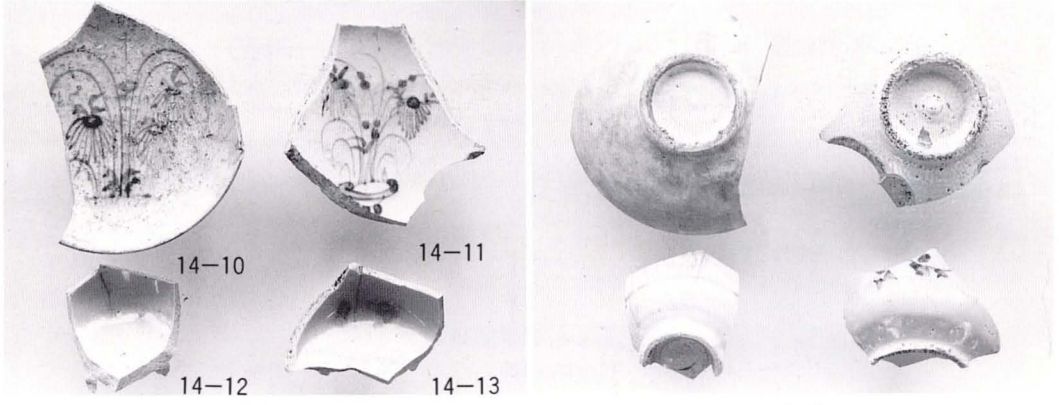
羽口



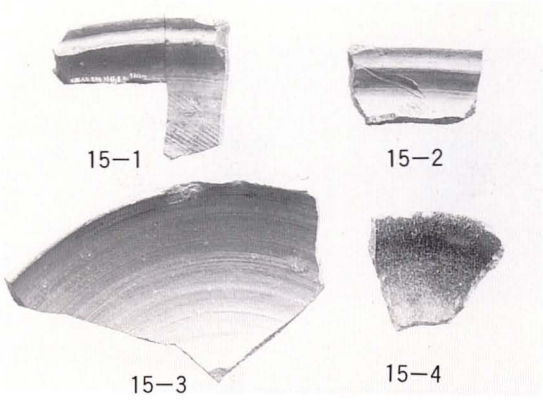
（内面）　（外面）



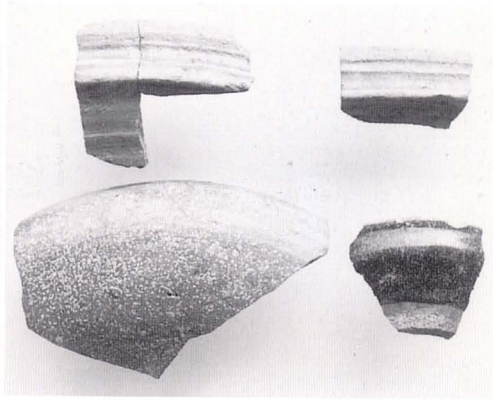
（内面）　（外面）



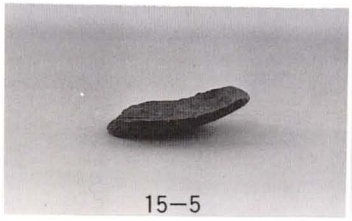
（内面）　（外面）

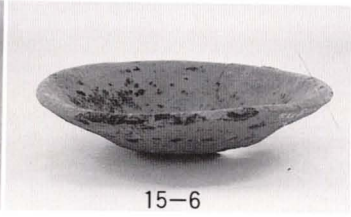


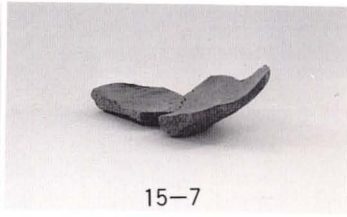
（内面）

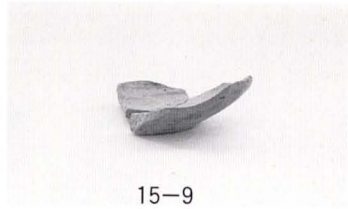


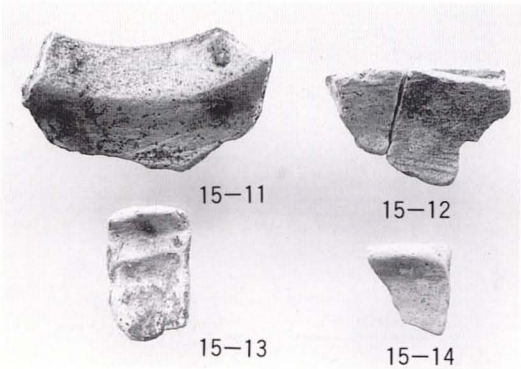
（外面）



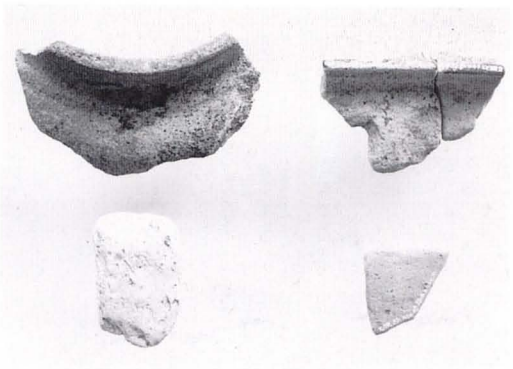




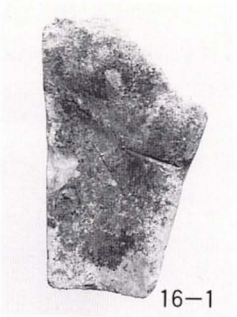




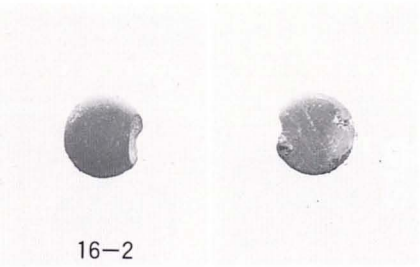
（内面）



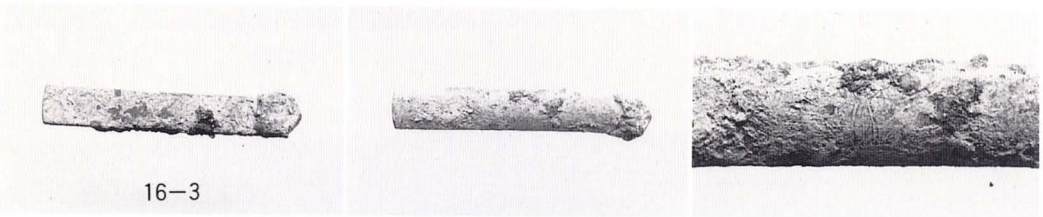
（外面）



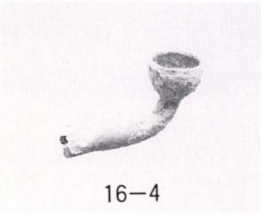
16−1



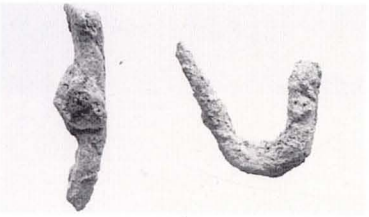
16−2



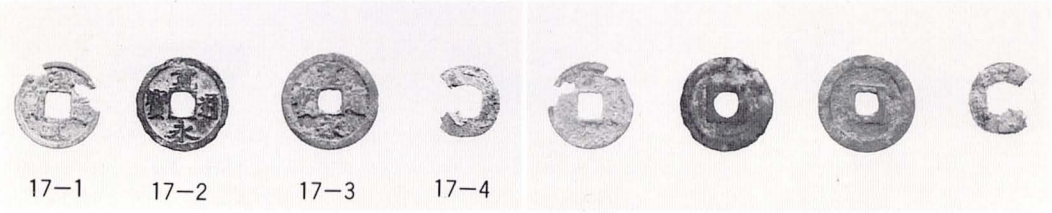
16−3



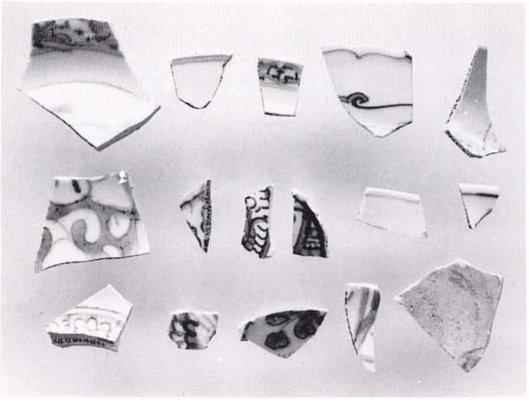
16−4



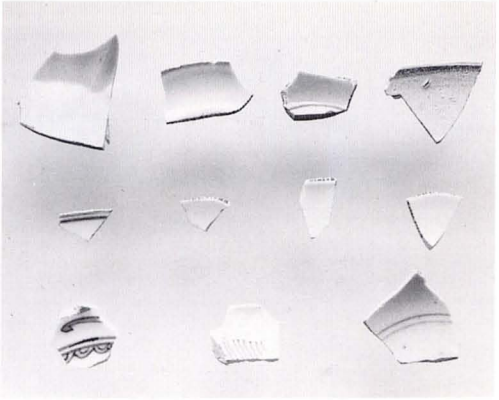
釘



17−1　17−2　17−3　17−4



出土中国磁器（1）



出土中国磁器（2）

大田市埋蔵文化財調査報告 19

石見銀山遺跡発掘調査概要7

１９９４年３月

島根県大田市教育委員会
（島根県大田市大田町大田ロ１１１１番地）